



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1991

発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 聖霊と聖体の関係

1 「あなたたちは間もなく、聖霊で洗礼を受けるだろう」(使行1・5)とイエズスが約束された御言葉が教えるのは、聖霊と洗礼との特別な連関です。先の考察で学んだように、聖ヨハネが悔い改めの洗礼をヨルダン川で授け、キリストの到来を宣言した時より、「聖霊と火とで」洗礼を授ける御方のもとに私たちは引き寄せられるのです。イエズス御自身が受けられた独特な洗礼そのものにも引き寄せられます。(マルコ10・38参照)それは「永遠の霊によって」(ヘブライ9・14)キリストが捧げられた十字架の犠牲のことで、「第二のアダムは命を与える霊となつた」(コリント①15・45参照)と聖パウロは述べています。ご存じのように、御復活の当日にキリストは使徒たちに生命の与え主である聖霊を授けられました(ヨハネ10・22参照)その後の聖霊降臨の日には、一同が

2 「聖霊で洗礼を授けられました」(使行2・4参照)です。越の犠牲と聖霊の賜との間には客観的な関係があります。御聖体はキリストの贖いの犠牲を更新するものであることからわかるように、この秘跡と聖霊の賜とは内在的連関があるのです。聖霊は聖霊降臨の日に来臨して教会を創立されましたが、その礎を御聖体との客観的な関係におき、御聖体を中心に組織されました。

3 「永遠の霊によって、汚れのないご自分を神に捧げられたキリストの御血」(ヘブライ9・14)が教会に現存しておられます。それは「罪のゆるしを得させるために」(マテオ26・28)「多くの人のために流される」(マルコ14・24)血であり、「私たちの良心を死の業から清め」(ヘブライ9・14)る血であり、「契約の血」(マテオ26・28)です。イエズス御自身が御聖体を制定される時に「この杯は私の血による新しい契約である」(ルカ22・20、コリント①11・25参照)と言われます。「私の記念としてこれを行え」(ルカ22・19)御聖体には、世の贖いのために十字架の上でキリストが一度限り御父に御体と御血を捧げ給うた犠牲が再

4 御聖体はこの贖いをもたらす愛の秘跡で、聖霊の現存と御働きに密接につながっています。ここで思い出すことは、パンを増やされた後(ヨハネ6・27参照)カファルナウムの会堂で語られたイエズスの言葉です。この時イエズスは、御自分の肉と血を食することが必要であると宣言されたのでした。「人の子の肉を食はず、その血を飲まなければ」(同6・53参照)というイエズスの主張を聞いた多くの者は「むづかしい話だ」(同6・60)と思いましたが、その難しさを知ってイエズスは言われました。「そんなことでつまずくのか。それなら人の子が元いた所に昇るのを見たら」(同6・61)62)これはイエズスが将来昇天されることへの明白な言及でした。まさ

5 聖霊降臨の出来事に関連して意義深い事実があります。聖霊降臨の後のごく早い時期から、使徒たちと主に従う人たちは、回心し受洗して「パンを裂くこと、祈りをする」ことに専念していた(使行2・42)が、それはあなたも聖霊御自身が彼らを御聖体の方へ連れていってくださった結果のようであったのです。回勅「ドミニム・エト・ヴィヴィフィカントム」で私はこう申しました。「聖霊に導かれて、教会はそもそも始めから、そのアイデンティティを表現し、確認するのに御聖体をもってしてきた」と。(62番)初代教会は使徒の教えに基礎をお

の中心に位置して「世の罪を除き給う」神の小羊、贖い主です。教会は聖霊降臨の洗礼で生れたのですが、その時使徒たちが他の弟子たちやキリストに従う人々と一緒に「霊によって洗礼を授けられる」その教会では、御聖体は、現にキリストの御体と御血の秘跡であると共に、時の終りに至るまでそうであります。

「永遠の霊によって、汚れのないご自分を神に捧げられたキリストの御血」(ヘブライ9・14)が教会に現存しておられます。それは「罪のゆるしを得させるために」(マテオ26・28)「多くの人のために流される」(マルコ14・24)血であり、「私たちの良心を死の業から清め」(ヘブライ9・14)る血であり、「契約の血」(マテオ26・28)です。イエズス御自身が御聖体を制定される時に「この杯は私の血による新しい契約である」(ルカ22・20、コリント①11・25参照)と言われます。「私の記念としてこれを行え」(ルカ22・19)御聖体には、世の贖いのために十字架の上でキリストが一度限り御父に御体と御血を捧げ給うた犠牲が再

にこの時点で、聖霊のことは御昇天の後でしか充分には理解できないということもイエズスは付言されたのです。こう言われました。「生かすのは霊で、肉は何の役にも立たぬ。私の言った言葉は霊であり命である」と。(同6・63)御聖体についてイエズスが最初に宣言されたのを聞いた人たちは「物質的な」意味に理解しました。主はすぐ説明し、この言葉は、命の与え主である「霊」によってのみ明確に理解できると仰せになりました。御聖体によってキリストは、御自分の肉と血を食物と飲物としてお与えになります。それは最後の晩餐の場合と同じく、パンとぶどう酒の形色(外観)の下にです。命の与え主である霊によってのみ、御聖体の食物と飲物は私たちに「聖体拝領」すなわち、十字架にかけられ栄光に入られたキリストとの救済的一致(救いに導く一致)をもたらすのです。

にこの時点で、聖霊のことは御昇天の後でしか充分には理解できないということもイエズスは付言されたのです。こう言われました。「生かすのは霊で、肉は何の役にも立たぬ。私の言った言葉は霊であり命である」と。(同6・63)御聖体についてイエズスが最初に宣言されたのを聞いた人たちは「物質的な」意味に理解しました。主はすぐ説明し、この言葉は、命の与え主である「霊」によってのみ明確に理解できると仰せになりました。御聖体によってキリストは、御自分の肉と血を食物と飲物としてお与えになります。それは最後の晩餐の場合と同じく、パンとぶどう酒の形色(外観)の下にです。命の与え主である霊によってのみ、御聖体の食物と飲物は私たちに「聖体拝領」すなわち、十字架にかけられ栄光に入られたキリストとの救済的一致(救いに導く一致)をもたらすのです。

初代教会は使徒の教えに基礎をお

いた共同社会で(使行2・42)、これを完全に活性化し、聖霊は信者を啓発して御言葉を理解させ、愛をもって御聖体の周りに集まらせました。こうして教会は成長し、「心と霊を一つにしていた(使行4・32) 信者の群れとなったのです。

**6** 先に引用した回勅にこうありまず。「御聖体によって、慰め主なる勧告者(聖霊)の御働きで、個人も共同社会も人間の生命の神的な意味を発見できるようになる(62

番)と。人々は内的生活の価値を見出し、自分の中に三位一体の神のイメージを認識します。三位一体については新約の各書にいつも出てきます。特に聖パウロの書簡では、私たちの生命の始めであり終りである、つまり人が創造され形成される原理であるとともに、子なる御言葉、聖霊なる愛に反映されている御父の御旨と御計画に方向づけられ、導かれていく最終目的であると示されています。この美しく深遠な解釈は教父

の伝統であり、聖トマスが神学的に要約し定式化してキリスト教的靈性と人類学の重要原理としたのです(「神学大全」第一部、第93設問、第8項)。

エフエゾの信徒への手紙にはこう表現されています。「さて私は主イエズス・キリストの父の御前にひざまずこう——父から天と地の全ての家族が起ったからである——キリストが、その光栄の富に従って、その霊によって、あなたたちの内の人を

力強く固めてくださることを、また、愛に根ざし愛に基を置くあなたたちの心に、信仰によってキリストが住まわれるようにと願う。あなたたちは全ての聖徒とともに、かの奥義の広さと長さや深さを理解する力を受けよう。あなたたちは計り知れぬキリストの愛を知り、満ち満ちる神によって満たされるであろう。」(3・14・19)

**7** この神性の満ちあふれを私たちに与えてくださるのはキリストであり(コロサイ2・9・10参照)それは聖霊の御働きによるのです。こうして神的生命に満たされ、キリスト者は全的キリスト(キリスト全体)すなわち教会の満ちあふれの中に入り、次第に建設される新しい宇宙の中に教会によって生きるのです。(エフエゾ1・23、4・12・13、コロサイ2・10参照) 教会の中心に御聖体がおられ、キリストの人類と全世界における現存と御働きは聖霊によるのです。(90・9・13)

大聖グレゴリオ教皇選出千四百周年は大変意義深い年であり、教会の信者、特に司祭と司教の皆さんに注目して頂きたいと思えます。歴史に伝えられてきた彼の偉大さを表す名譽の称号、彼の義務と行動の基準となった鋭い司牧感覚(関与しなればならなかった日常の諸事や責務よりもまず司牧を優先させた)、カンタベリーのアウグステイヌスとその修道士に勇気を求めたり多い福音宣教のためにアングロサクソンへ派遣したこと。以上は大聖グレゴリオのすばらしい人柄を顕著に示すほんの数例にしすぎませんが、特筆するに値しますし、彼の時代から幾世紀をも経た今日でさえ多くの人の立派な模範となっています。

大聖グレゴリオの、人間として、また司祭としての姿は、今日なお私たちに称賛の念を起させます。新しいとまでは言えないけれども、この大きく変わった社会的文化的風潮にも拘わらず、教皇は今なお福音への忠実さをはつきり示す証人であり、魂の牧者としての私たちの創造力を鼓舞し、情熱をかきたてるように思われます。

「セルヴス・セルヴォールム・デイ(神のしもべたちのしもべ)」。大聖グレゴリオが助祭の頃に選んで使ったこの呼び名は、後に伝統的の称号とな

「私は仕えられるためではなくて仕えるために、多くの人のあがないとして自分の命を与えるために来た(マテオ20・15)と仰せられたキリストに倣い、自らを神のしもべたちのしもべ、全ての人のしもべと考え、そのように振舞いました。大聖グレゴリオは教皇職について高邁な概念をもっていました。ひっそりと隠れた存在でいようと努め、教皇職に就くのを避けようとしたのですが、大いに迷ったため後、やっとその役を引き受けることにしました。それが同時に大聖グレゴリオは仕える

義務について実に明確な認識をもっていました。あらゆる権能、特に教会内における権能は本質的に奉仕であると自覚し、人々にもそれをわか

厳しい訓戒の言葉を忘れることができません。どうか、「どうしてある人々には、何の準備もなしに司牧職を引き受けられると思うのだろうか。(…)霊の法則に無知な者が、しばしば怖れげもなく自らを『魂の医者』だと称する。『聖なる名を頂き聖なる叙階を受けておきながら、その後で邪悪な生活を送る人ほど教会内で悪を行うものはいない。』(Reg. Past., I, cc. 1, 2 参照)

「司牧的」と称される第二バティカン公会議(軽薄で表面的でなく、現代の要求に応じてはつきりと実践的な選択をした故こう呼ばれ、救いの福音に仕えようと努める)の後、25年を経た今、この貴重な本をもう一度取り上げ、今もなお価値ある教えと司牧経験から、役に立つ助言を学ばまことに絶好の機会だと思えます。また、成果が発揮されるまでには経験を積み重ねる必要がある芸術的な仕事のための秘訣を見つめるためにこの本は非常に役に立つことでしょう。(一九九〇年)



# 神のしもべたちのしもべく

## 教皇大聖グレゴリオ

り、ローマ司教を表す称号となりました。大聖グレゴリオがこの称号をもったのは、明らかに誠実な謙遜の心からです。また、キリストの教会内における普遍的任務を考え、みずから第一の偉大なしもべ、すなわち、

「私は仕えらるるためではなくて仕えるために、多くの人のあがないとして自分の命を与えるために来た(マテオ20・15)と仰せられたキリストに倣い、自らを神のしもべたちのしもべ、全ての人のしもべと考え、そのように振舞いました。大聖グレゴリオは教皇職について高邁な概念をもっていました。ひっそりと隠れた存在でいようと努め、教皇職に就くのを避けようとしたのですが、大いに迷ったため後、やっとその役を引き受けることにしました。それが同時に大聖グレゴリオは仕える

義務について実に明確な認識をもっていました。あらゆる権能、特に教会内における権能は本質的に奉仕であると自覚し、人々にもそれをわか

厳しい訓戒の言葉を忘れることができません。どうか、「どうしてある人々には、何の準備もなしに司牧職を引き受けられると思うのだろうか。(…)霊の法則に無知な者が、しばしば怖れげもなく自らを『魂の医者』だと称する。『聖なる名を頂き聖なる叙階を受けておきながら、その後で邪悪な生活を送る人ほど教会内で悪を行うものはいない。』(Reg. Past., I, cc. 1, 2 参照)

「司牧的」と称される第二バティカン公会議(軽薄で表面的でなく、現代の要求に応じてはつきりと実践的な選択をした故こう呼ばれ、救いの福音に仕えようと努める)の後、25年を経た今、この貴重な本をもう一度取り上げ、今もなお価値ある教えと司牧経験から、役に立つ助言を学ばまことに絶好の機会だと思えます。また、成果が発揮されるまでには経験を積み重ねる必要がある芸術的な仕事のための秘訣を見つめるためにこの本は非常に役に立つことでしょう。(一九九〇年)

「道」(新改訂版)

「殿」(きたえの)

ホセマリア・エスクリバー著  
新田壯一郎訳 定価一六〇〇円

「道」(新改訂版)

ホセマリア・エスクリバー著  
精道教育促進協会スタッフ訳 定価一三三六円

# 説教・講話・書簡等の抄訳

## 聖霊は使徒継承の源泉

### 「聖霊」シリーズ ①

1 「キリストのからだ」の魂で

ある聖霊の御働きを説明する中で、聖霊が教会の「一性、聖性、公(普遍性)の源泉であり、原理である」ことを考察してきました。「一、聖、公、使徒継承」を使徒信経の中で宣言しますが、今回は、聖霊が、教会の四番目の特徴であり特性である「使徒継承」の源泉であることについて考えてみましょう。聖霊のおかげで教会は「使徒継承」なのです。パウロが言っているように、教会が、キリスト自身を隅の親石として「使徒の土台の上に建てられて」いるからなのです。(エフエソ2・20)これは、聖霊論に照らして見た教会論の大変興味深い点です。(エフエソ2・22参照)

2 聖トマス・アクイナスはこれ

を使徒信経に関するカテケジスで強調しています。「すでに置かれていたイエズス・キリスト以外のほかの土台を、誰も置くことはできぬ」(①3・11)と聖パウロがコリント人に宛てた書簡で断言しているように、教会の第一の土台はキリストである。しかし第二の土台がある。それは使徒たちとその教えである。それゆえ、教会は使徒継承であるといわれる。「使徒信経解説」第9項) このトマスのテキストは、教会の使徒継承に関する彼や中世の考え方を証言するとともに、教会の土台が

キリストと使徒とのつながりであることを思い起させます。このつながりは聖霊によって生まれました。これが示すのは使徒継承についての神学上の真理であり、啓示された真理ですが、この使徒継承の始まりと源は、真理における一致(交わり)の創始者、つまり聖霊なのです。そしてその真理は使徒たちをキリストに結び、使徒たちの教えを通して、各世代のキリスト信者と教会を歴史を通してキリストに結び合わせます。

3 幾度となく私たちは、イエズスが最後の晩餐で弟子たちに

言われたことを繰り返してきました。「弁護者すなわち父が私の名によって送られたもう聖霊は、全てを教え、あなたたちの心に私の話したことをみな思い出させてくださるだろう」(ヨハネ14・26) キリストが受難の前に話されたこの言葉は、ルカが記す使徒行録の中で完結しています。イエズスは「聖霊によって選ばれた使徒たちに訓戒をしてのち、天に昇られた」(使行1・2) また、使徒パウロは自ら死に直面しつつ、テイモテオに書き送っています。「私たちの内に住まわれる聖霊によって、ゆだねられたよいものを守れ」(テイモテオ②1・14)と。それは、降臨された聖霊、使徒たちとその共同体を満たされる聖霊、教会内で世代から世代への信仰継承を保証される聖

4 使徒行録には、聖霊論の面から

教会が使徒継承であることとを理解することができる記述があります。使徒パウロは「霊に強いられて」(使行20・22)、エフエソで福音を聞いた人々がパウロの顔をもう見ないであろうことを感じてエルサレムに行き(同20・25)、その町に集まった教会の長老たちに語りました。「あなたたちは自分と群れ全体に気をつけなさい。聖霊は神が御血をもってあがなわれた教会を牧するため、あなたたちを教会の監督と定められたのです」(同20・28)「司教」とは監督官、指導者を意味する言葉で、牧者のことです。使徒が伝える真理の土台の上に留まっている間、パウロが予感するように、使徒たちの教えから弟子たちを引き離そうとして「有害なこと」(同20・30参照)を広める人々が真理を歪め、脅すことでしょう。そこでパウロは牧者に、気をつけて自分の群れを守れと仰います。聖霊が彼らを「司教」として群れに送られるのですから、聖霊が司教たちを支えてくださることをパウロは確信しているのです。使徒の後継者に、使徒たちがキリストから受けた真理を守る力と素質を与えてくださる御方、神の民のために真理を守り、また神の民がその真理に堅忍するよう保護なさるのには聖霊であると確信していたのです。

5 使徒たちとその後継者は、キ

リストの真理を守る仕事のほかにそれを証言する義務を担っています。聖霊の助けを得て初めてその仕事を成し遂げることができるようです。昇天の前にイエズスは使徒たちに「あなたたちはエルサレム、全ユダヤ、全サマリヤ、地の果てまで私の証人となるであろう」(同1・8)と言われました。これは使徒たちをキリスト御自身の使命に結びつける召し出しです。黙示録はそのキリストを「忠実な証人」(黙示録1・5)と呼んでいます。事実、使徒たちのための祈りの中でキリストは御父に言われました。「あなたが私をこの世に送られたように、私も彼らを世に送ります」(ヨハネ17・18) そして、復活の夜の出現の時、キリストは聖霊の息を吹きかける前に、弟子たちに言われました。「父が私を送られたように、私もあなたたちを送る」(同20・21) しかしキリストの使命を続ける使徒たちの証言は、キリストを証しする聖霊と強く結びました。「私が父からあなたたちに送る弁護者、父から出る真理の霊が来るとき、それが私について証明されるであろう。あなたたちも私を証明するだろう。あなたたちは初めから私と共にいたからである」(同15・26)最後の晩餐でのイエズスのこの言葉は、昇天の前に使徒たちの耳に再び響きました。その時キリストは、死と復活の永遠の計画を明らかに言われたのです。「その御名によって：諸国の民に、罪のゆるしを得させる悔い改めが述べ伝えられる：あなたたちはこれらのことの人である。私は父の約束されたものをあなたたちに送る」(ルカ24・48)

6 使徒たちは、十字架につけ

られ蘇られたキリストの「証人となる」ことについて、聖霊と結ばれることに気付いていました。パウロと使徒たちの大司祭への答えがそれを明確に示しています。大司祭は彼らを黙らせ、キリストについて語らせまいようにしました。「私たちの先祖の神は、あなたたちが木につけて殺したイエズスをよみがえらせたいました。神は痛悔と罪のゆるしをイスラエルに与えるために、右の御手をもって、イエズスをかしらとし救世主として上げられました。私たちはこのことの証人です。そして神が御自分に従うものに与えられた聖霊もまたその証人です」(使行5・30)32) 教会もその発展の歴史を通して、キリストの証人となるべき、いつも聖霊が共にいてくださることを知っています。民の限界もろさを知り、またパウロがミレトでの別れの時「司教」に勧めた警戒を怠ることなく努力する教会は、主から受けた教えを間違えることなく宣言できるように聖霊がいつも守ってくださることを知っています。第二バティカン公会議は次のように言っています。「神なるあがない主は、ご自分の教会が信仰と道徳に関する

「拓(ひろく)

ホセマリア・エスクリバー著  
新田壮一郎訳

定価一六四八円

# 不変の教え

教義の決定に際して不謬であること望まれたが、この不謬性はたいせつに守られ忠実に説明されなければならぬ。教会憲章(25) この憲章は、司教団、特に使徒の後継者であり、聖霊によって使徒たちから受け継いだ真理を守る人であるローマの司教に、どのようにして不謬性が及ぶかを明らかにしています。

7 聖霊は使徒継承に命を与える源です。聖霊のおかげで教会は、歴史の各時代を通して、常に同一の福音を保ちながら、もろもろの文化と文明の中に根をおろしつつ、世界に広がっていくことができるのです。教会の宣教活動に関する教令には次のように記されています。「キリストは、父のもとから聖霊をおつかわしになった。聖霊は、その救いのわざを内面から働きかけ、教会を独自の発展へと推し進める。…主イエズスご自身、世のために進んで命を捨てられる前に、使徒的職務の定め、聖霊の派遣を約束された。こうして救いのわざにおいて、いずこにでも、いかなるときにも効果をえるようにと使徒的職務と聖霊とを結び合わされたのである。あらゆる時代に、教会の諸施設に対しては、聖霊がその魂であるかのようにそれらを生かし、信者の心にはキリストご自身を動かしたあの同じ宣教精神を注ぎこまれる。」(4) さらに教会憲章は強調しています。「キリストから使徒たちに委ねられたこの神的使命は世の終りまで続く。(マテオ28・20参照) なせなら、彼らが伝えるべき福音は教会にとって、あらゆる時代を通して全生活の源泉だからである。」(20)

## 回心への呼びかけ

社会の心情が悔い改めを困難にしていると教皇ヨハネ・パウロ二世は言われる。

「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じよ。」(マルコ1・15)

これは、イエズスが洗礼を受け、父なる神から「わたしの愛する子」と宣言され公生活を始められた時、最初におっしゃった言葉です。いわばプログラムのようなもので、贖い主キリストの福音宣教事業全体がこの御言葉に要約されています。

兄弟姉妹の皆さん、この御言葉は宣言であり、招待であり、人類にとっては今すぐ、と迫り挑戦してきます。この御言葉はまず「神の国」を人間の歴史の中ではっきりとした啓示として宣言し、キリストが公に解明されたことによって、神の国が「近づいた」、誰にでも手の届く範囲のものとなったということです。

実際、キリストの御言葉と救いの行い—なかでもその死と復活—において、人々は救われ、神の国の参加者となり主人公となることのできるのです。その究極は時の終わりに来ます。

こうして、昔からの約束は果たされ、正義と兄弟愛の世界と、父であ

り救い主である神との出会いとを渴望している人々の期待が全てかなえられるのです。

イエズスが私たちに求められる回心は本当の「回れ右」であって、死から生への、罪の奴隷から神と人々に対する奉仕への、利己心から愛への、分裂から共生への転回です。これは根本的変換で、キリストの教えにより、つまり神と人々との関係が「新しくなる」事によって啓発され、心も行いも、深く切れ目なく変換されるものでなければなりません。

言い換えれば、神の国は単に信仰で受け取る「贈り物」であるばかりではなく、到達点でもあり、生活の中で絶えず果たすべき誓約でもあるのです。このためには、聖霊に従順でなければなりませんし、世の物事に対する内的な「暴力」(マテオ11・12、ルカ16・16参照)とも言うべき強い決心がいりますし、絶えず努力して福音の要求するところまでたどりつき、これを生活のスタイルに具体化しなければなりません。

更に、この回心への招待に応じるためには、自己を利己心から切り離し、社会的な保障手段や虚偽の偶像を放棄しなければなりません。それらのものは神の計画の成就を妨げ、

その計画に切に添おうとする各人の思いを邪魔するからです。まず、キリストに従い、友情と共生の関係を樹立してキリストの弟子となり、それ故にキリストの証人となり、神の救いの計画に仕える先駆者とならなければなりません。

今日の主日に当たって、まず申し上げたいのは、聖霊はローマ教会に共生と宣教の面での更新を要求しますが、その根本的基礎として、また恒常的要件として、各人がもっと深くキリストへの回心に参入しなければならぬということです。

このためには、すでに主の召し出しを受けて神の国の参加者となっている人々が、神との一貫した全人的な関係に生きようとする決心を新たにし、強めなければなりません。罪の外面的な魅力や古くて新しい偶像から次々に生じる誘惑を克服するのは、人々を神から離したり、互いに敵対したり離間したりすることがないよう努めなければなりません。また、キリストに従って、キリストが教会によって究極的な完成を見ようと欲しておられる救いの計画の証人となり、協働者となる約束を更新しなければなりません。

現代社会の観点や習慣からすれば、これは容易なことではないでしょう。個人の絶対的自立への熱望や、広範な無関心、キリスト教的な価値や神の掟から遠ざかろうとする傾向、モダンな行動や思考といったものは、一向に役立ちません。ですから、勇気と善意とこれを求める祈りの支えが

今日の第一朗読で神が預言者ヨナになされた呼び掛けは、皆さんに向けられていることを感じとってください。「立って、大きな町ニネベに行き、私の言うことを告げよ」と。ヨナは仰せに従い、神の求めに応じて行きました。救いを受けるために緊急に回心が必要であることをヨナは勇敢にも説きました。ニネベの市民はヨナの言葉を真剣に受けとめ、悪の道を離れました。こうして経験したのは神の慈悲と解放でした。

ローマのような大都市ですら、信仰と古来の宗教的伝統に富んでいるから、福音とは違った道を歩み、神から遠ざかって虚偽の安全に惑わされる人々に事欠きません。

しかし、新しい状況に応じ、特に真理と愛と正義への期待に応えるためには「新しい福音宣教」、もっと強力な福音の提案が必要です。イデオロギーの崩壊や、人間のおよびキリスト教的な価値の消失に直面することによって、そういう期待が実に多くの人々の心の底から沸き上がってきているのです。

信者の皆さん、若者たちの問題を解決するために(…)家庭の道徳的価値を促進し、男女間の健全な愛を理解させるよう努力してください。(…)

願わくは、我らの主イエズス・キリストの父なる神が皆さんに賢明の精神を与えられ、この希望に召されていることを知り、これに対する皆さんの応答が忠実潤沢なものでありますように。

(91・1・27)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費  
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393